

2025年2月1日

第1回 全国高校新聞コンテスト 講評

全国高等学校新聞教育研究会
第1回高校新聞コンテスト実行委員会

<コンテスト復活までのあゆみ>

今から5年ほど前の2018年。高校新聞を対象とする2つのコンクールの中止が決定されました。大東文化大学主催の全国高校新聞コンクールと読売新聞主催のインターハイ新聞コンクールがそれです。その直後から、高校新聞に光を当てる「コンクール」の復活を求める声が、全国の高校新聞の顧問と指導者から寄せられるようになりました。それを受けて、高校新聞指導者の全国組織である全国高等学校新聞教育研究会（以下「全高新」）は、新聞社や大学に加えて、高校新聞の活動に理解を示していただける企業や団体にも、「コンクール復活」に向けて、ご協力をお願いする働きかけをつづけてきました。しかし、新聞の購読数の激減や少子化による大学の経営悪化などが壁になり、働きかけが実を結ばない状態が、5年に渡って続きました。

昨年10月の第73回全国学校新聞指導者研修会終了後、全高新常任理事から「来年度に全国新聞コンクールが復活できるように組織として全力を注ぐべきだ」という強い決意が表明されました。これをきっかけに、全高新ではコンテスト復活に向けた準備委員会を発足させ、活動を活発化させてきました。準備委員の働きかけで、2つの組織に「後援」のご協力をお願いすることができました。一つは、ジャーナリストの組織である「報道実務家フォーラム」。もう一つは、メディアの新しいあり方を研究されている「早稲田大学次世代ジャーナリズム・メディア研究所」です。今回、第1回全国高校新聞コンテスト発足に当たり、2つの組織の皆さま方に、全国高等学校新聞教育研究会として、心よりお礼を申し上げます。

<コンテストについて>

コンテストを始めるにあたって、応募紙は「1号のみ」とすること、募集は8月7日とすること、8月末までの一次審査、9月末の最終審査、10月12日に香川県善通寺市で開催する全国学校新聞指導者研修会での入賞校の表彰をすること、などを決めました。審査基準はどうするのか、応募紙は年間で何号にするのか、などが次の課題となりました。応募紙の整理と審査には、大きな労力と資金が必要です。全国の高校で頑張っている新聞部員に光を当てるコンテストを、全高新の力でどう作るかを慎重に検討する中で今回は「一号のみで審査する」ことを決めました。「表彰式を10月にする」と決めたのには、「応募紙を作った部員が在籍しているうちに審査結果を伝えたい」という、主催者としての強い思いがありました。この決定に、協力して頂いた審査員や後援団体の皆さんに、全高新は心から感謝しています。

今回のコンテストは、告知が全国総文祭岐阜大会の直前の7月、締め切りが8月7日と、厳しい日程でしたが、全国から83紙もの応募紙が届きました。小さな1面だけの紙面もあれば、30面を超えるものまで、様々でした。その中から、形や大きさの違いに惑わされず、「学校新聞がどんなメッセージを伝えようとしているか」、そして「高校生の声をどのように取り上げているか」、「その学校新聞がどんな働きをしているか」、など、募集要項に示した基準をもとに、審査員は送られてきた紙面を審査しました。

<入賞紙について>

金賞には4校を選びました。北海高校「北海高校新聞」は、特集の「恋とルッキズム」、論説の「倍速視聴」など、高校生を取り巻く問題に鋭く切り込んでいること、地域が題材の「ラーメン」の特集も生徒や業者の声を丁寧に拾っていること、どの記事も生徒の声をよく取材して伝えていること、見出しや写真を大きく使い読みやすい紙面をブラケット判で作っていること、などを評価しました。金沢泉丘高校「いずみの原」は、北陸新幹線から湿地を守り抜いた人々に特集で光を当てた記事が凄いです。多くの関係者に取材して、生徒の認知度が低いこの問題をよく掘り起こしています。地元で起こった能登半島地震を3回に及ぶ取材と鮮明な写真で生徒に伝えている8面の特集の取材力はプロ顔負けだという評価がありました。ただ、「この号には生徒の話題が少ないのが少し残念だ」という指摘もありました。崇徳高校「崇徳学園新聞」は18歳で被爆した阿部静子さんや当時の白黒写真のカラー化を手掛ける庭田さんへの取材など、原爆を取り上げた記事が充実しています。写真中心の「被爆樹木」など、もう少し深めたい記事もありました。清水東高校「清高新聞」はA4判、校内印刷の小さな紙面ですが、16面の紙面の中は、しっかりした視点でよく取材された記事で満たされていました。「生成AIの功罪」は生徒と先生22人へのアンケートや、他県の導入例なども取材してその功罪を分析し、部としての考えを部説でまとめています。3人の部員ですが、「コロナ禍」、「地震の脅威」など、生徒に関わる問題を幅広く取り上げていて、どの記事も、とてもよくまとめられていました。

銀賞も4校を選びました。帯広柏葉高校「柏葉高新聞」と越谷北高校「越谷北高新聞」は、関心の高い問題について、どちらも生徒の声をよく拾いながら取り上げて読みやすい紙面を作っています。杉森高校「杉森高校新聞」は、「かごしま総文」の研修取材で、特攻の「知覧飛行場」の本部が地元福岡の「大刀洗飛行場」にあったことを知り、この問題を丹念に取材して取り上げた記事は、地域の問題に改めて着目するととても良い記事になってました。虎姫高校「虎姫高校新聞」は「UPZ（原子力災害を実施すべき地域）」を実地調査した「足で稼ぐ取材」による記事がありました。

このほか、銅賞には5校、奨励賞には8校を選定しました。

<学校新聞全体について>

今回の応募83紙には、SNSやAIなどの情報化、ヤングケアラー、ルッキズムなど高校生の生活に関わる社会の変化に伴う問題が多く取り上げられていました。また、能登半島地震などの自然災害、人口減少や新幹線開通など、地域の問題を取り上げた記事が、目立ちました。文化遺産に注目した記事も含めて、身近な地域に目を向けた企画記事が、明らかに増えています。地域に目を向けることは、学校新聞として、とても大事な視点です。しかし、地域、社会の問題には意見の別れる問題も多くありますから、取材先の選定には注意が必要です。一方的な見解だけを安易に取材して、読者に伝える弊害も生まれ易いのではないかと、応募紙を見ていて感じました。取材先の選定は慎重に行われる必要があります。ここでは、顧問的確なアドバイスも必要かと思われれます。

一方で、部活や文化祭行事など校内の記事の作り方がどの学校も非常に似ていて、平板な記事が多いと感じました。校内の記事をどう作るかは、その新聞が生徒の期待に応えられているかを決める大きな指標です。各校がどんな工夫をして校内のニュースを伝えているかを、相互に交流して学んでほしいと感じたことを伝えておきます。